

血かたびら(四)

御臺まいらす。よくきこしをして、難波の蛭がみつぐは、古も近きかとぞ。

(五) 御臺まいる。いとようきこしめして、難波とやらのちかくて、あぶり物うましとぞ。

(冊)

くすり子申す。かしこに都あらせし帝は、御父の弟御子を立て、日嗣とは定めたまひしかば、神去たまひては、兄み子打もだし、宇治につかふまつり給ふを、兎遅のみ子は、我、兄に諭て登極せん事、聖の道にあらざとて、譲たまへど、否、既に日継のみ子とは、君を定めたまひしぞとて、三とせまで相ゆづりて、御座むなしかりしかば、弟み子は、ついに刃にふして世をさらせしとぞ、

(五) 菓子申。なにはに宮古あらせしみかどは、御ちゝ帝の、弟みこをわきていつくしませしかば、神さり給ふ後に、御おとうとの皇子に、御くら居あらせよとありしを、宇治のみこ、兄にこゆるためしやあるとて、三歳までゆづりかはしたまへば、

(冊)

難波の蛭等貢ぐ真魚は、をちこちさまよひて、道にくされたりしとぞ、蛭なれや、おのが物からもていさつとなん、かたりつたへたる、

(五) なに波の蛭が貢の真魚、いづれにと奉りまどひて、海人なれや、おのが物からもていさつと、うたになげきしが、

(冊) 蛭がたてまつりものも、道についでと、有がたき昔がたり也と申。

兄のみ子いかにせん、御位に昇らせしを、聖王と申たてまつる(「り」ト改)、御名は世々にありがたく申つたへたりき、君わづかに四とせにており居させたまへば、臣も民も望失ひて、かなしと申とぞ、

(五) 遂に免道のみ子、自刃にふしたまひしを、いにしへにも、もろこしにも、ためしなき聖王とかたりつたへぬる、わづか四とせにて下居させしは、御こゝろの直きからのたわやぎ也、

(冊) 兄のみ子にこえて我在んやと、刃に伏したまへば、止むことなくて、御位にのぼらせたまひき、御代毎に、並びなきひじりのみこと、仰ぎたいまつりし、善柔は損多しと申されしぞ、乱世の人の心也、

今の帝は、もろこしのふみ読で、かしこの纂ひかはるあしきを試みさせしよと申す。あなかまとせいし給ふ。

(五) ゆづらばとて、即高きに昇らせし今の帝の、御こゝろまがれり、もろこしのふみよみて、かしこの纂(纂)ひかはるあしきためしをためしとして、御くら(あ)には登らせし也、あな恐し、

(冊) かしこの纂奪は、禅位をいつはりしいたづら言也、

いな、こゝにつかふまつる臣達は、今一たび、たひらの宮を都として、御くらぬにかへらせん事をこそねぎ奉ると申。

(五) 難波の帝のためしにかへさせて、今一たびたひらの宮にたゞせ給へ、百官百司、民の心もしかあらばやとねがふと聞、太弟のからふみにさかしたちて、まつりごとおにくしく、こちかくしくて、世はこの末いかにとなげくとや、

(冊) 奈良の人も、臣達は、今一たびたひらの宮に御くらぬかん(へ)させんと、ねぎたいまつる。

太帝に心かよはず奈良坂の人も有て、聞(マ)ひらし、あなとぞ、さゝめきたりし。

(五) 北のみかどに心を通はず人も有けん、よからぬ事ぞとのらすにぞ。

仲成是につきて、君の下居はしばしの御脳み也と申て、御即位又あらせたまへ、今上の御心にたがはず、我、兵衛のかみ也、奈良山、泉川に軍だちして、稜威しめさんとぞ申。

(五) いそぎ一たびの宣旨をやめさするとなん、御つかひあらせよ、仲成つかふまつらんと、すぐろぎたて(つ)る。直きには、又是に枉られて、奈良の宮つかへする臣等にはかり問すれば、誰御こたへ申人もあらず。仲成、兵衛のかみなれば、此そなへに、昆明池にならびて、さほ川に戦ひならせしかば、

(冊) 仲成是につきて、君のおりるはしばしの御なやみ也と申す。ふたゝび御代にあらせんとしこつ、我、兵衛の督也、奈良山に軍だちして、みいつためさんと。

又、市町のわらべがうたふに、

花は南に先さくものを雪の北窓心さむしも
とうたふが、北に聞えて、平城の近臣をめして、推問はせたまへば、

(五) 都にしかくの事とはやも告て、又、市町のわらべ歌に、
花はみなみに先咲からに雪の北窓心さむしも

いよゝおどろかせたまひて、奈良の近臣をめされ、推問せたまへば、
(冊) 又、市町のわらべがうたふをきけば、
花は南に先さくものを雪の北窓心寒しも
とうたふを、北に聞えて、平城の近臣を召て問たまへば、

是は、薬子、仲成等がすゝめまいらす事也、此春のむ月のついたちに、れいのみ葉まいらすに、屠蘇、白散をのみすゝめて、度嶂さん奉らず、

(五) 是薬子、中(仲)成に事おこる、この春正月のつい立あした、れいのみくすりまいらす、屠蘇、びやく散たいまつりて、度嶂さんたいまつらず、
(冊) 是は、くすり子、仲成がすゝめたいまつる也、此春の正月のついたちに、れいのみくすりたいまつるに、屠蘇、白さんはすゝめて、度嶂さんを奉らず、

いかにとゝはせしかば、君、峭壁をこえさせまじきに、奈良坂たひらなれど、青垣山の外の重の山路也、この御墻の内だに、ことぐくは貢物たてまつらぬ、悲しくくとて、涙を袖につゝみもらしたり、

(五) いかなりや、ためしはと、問せたまふ、薬子が申、あやし、君、峭壁をこえさせたまふまじきに、奈良坂たいらかにこそあれ、青垣めぐりて、わづかに此みかきの内だに、ことぐくは貢もの奉らず、悲しくくと、ちらしつゝ、涙を袖につゝみて立さる時、
(冊) いかにと問せたまへば、君は山河をこえていかで在せたまはぬを、悲しくくとて、涙を袖につゝみもらしたり、

此時御前に侍りて聞し外は、正しき事しらず侍る、聖代に生れあひて、誰かは兵杖(仗)を思ふべき、と申す。

(五) 御まへに在て聞と申す。
(冊) 此時御前にありて聞しより外は、正しき事は知侍らずと申。

さらばとて、即官兵を遣はされて、仲成をとらへて首刎させ、那羅坂に梟させ、葉子は家におろさせて、こめをらす。

(五) さらばとて、即官兵を遣はされ、仲成をとらへて首刎させ、くすり子は家におりさせてこめしをらす。

(冊) さらばとて、官兵をつかはして、即とらへて、奈良坂に梟られたり。葯子は家にこめをらせて、いましめさせたまへり。

又、御子の高丘親王は、今の帝の、上皇の御心とりて、儲の君と定たまひしを、停めさせて、僧になれと宣旨あれば、親王かしらを薙ぎ、改名して、真如と申奉る。

(五) 又、御子の高丘親王は、今の帝の、上皇の御心とりて、まうけの君と定まりしをも、停めて、僧になれと、宣旨くだる。親王、改名真如と申。(冊) 又、御子の高丘親王をば、上皇の御心をととりて、儲の君と定めたまひしかど、停させたまひて、僧になれとて、かしらそがせて、真如と申奉るは、(冊*) 射れど箭折れ、刃にうてば刃缺たりしとぞ。又、御子の高丘親王を、春の宮に立させししかど、僧になれと、みことのりあれば、即髪をそぎたまひて、

三論を道詮に学び、真言の密旨を空海に習たまひ、猶奥あらばやとて、貞観三年唐土にわたり、行々葱嶺をこえ、羅越国にいたり、御心ゆくまで問學びて、帰朝ありしとぞ。

(五) 三論を道詮(に) 学び、真言の密旨を空海に授かり、猶奥あらばやとて、貞観三年に唐土にわたり、行々葱嶺をこえて、羅越といふ国にいたり、御心ゆくまゝに問學ばせたまひしとぞ。

(冊) 御才世にこえさせしかば、三論を道詮に授かりたまひ、真言の密旨を空海につたへて、猶奥あらばやとて、貞観三年に帰朝有し也。

(冊*) 鑑真をめして、三論を授かりたまひ、又、空海に真言の呪術を習ひえさせたまひしかど、尚奥有べしとて、もろこしにわたりたまひて、葱嶺をこえて羅越国にいたりて、心ゆくまゝに帰朝ありし也。

此皇太子の御代しらせたまはゞやと、みそかには上下申あへりきと也。

(五) このみ子、天のしたしろしめさばと、上下の人、皆申あへりき。

(冊) 此み子の御代しらせたまはゞと、みそかには申敢りとぞ。

(冊*) 此み子の天のしたしらせたまはゞと、上下皆みそかに申あへりとぞ。嗟乎く神のまにくならぬ事も有けるものを。

薬子おのれが罪はくやまずして、怨気ほむらなし、ついに刃に伏て死ぬ。此血の帳かたびらに飛走りそゞぎて、ぬれくと乾かず。たけき若者は、弓に射れどなびかず。劔にうてば刃缺こぼれて、たゞおそろしさのみまさりしとなん。

(五) くすり子はおのが罪は悔まで、怨気ほむらにもえのぼり、ついに刃にふして死ぬ。この血、帳かたびらに飛走りて、ぬれくと乾かず。たけき若ものら、弓に射れどなびかず。刃にうてば、かへりて缺そこなはるゝとなん。

(冊) くすり子、おのが罪をくやまずして、怨気ほむらとなりて、ついに刃にふして死たり。此血の帳かたびらに飛走りて、ぬれくとかはかず。若き者は、弓に射れどなびかず。劔にうてば、刃缺ぬ。たゞくおそろしき事となん、かたりつたへ申す。

上皇にはかたくしろしめさゞる事なれど、たゞあやまりつとて、御みづからおぼし立て、みぐしおろし、御齡五十二と云まで、世におはせしとなん、史にしるしたりける。

(五) 上皇にもかたくしろしめさゞれど、近臣等にみことのらす。上皇、あやまりつとて御ぐしおろしたまひ御よはひ五十式まであらせしとなん、いひつたへる。

(冊) 上皇はかたくしろしめさゞりし事なれど、たゞく黙してゐたまへり。御齡五十二まで、世にはおはしませりき。